

受賞者のスピーチ 要旨

文字起こし協力・藤田妙子／文責・岩垂 弘

基金賞（大賞） もりい てる
森井 轍さん
西日本新聞社社会部員

沖縄問題は本土も当事者



今年の1月から沖縄復帰50年の企画を始め、『島とヤマトと』という連載を中心に、沖縄と本土の距離感に焦点を当てながら基地問題のあり方、報道のあり方を描いた。

我々の地元の福岡でも、福岡空港は50年前まで米軍基地として使用されていて、米軍機の墜落事故などが起きていた。なのに、基地がなくなってからは、基地による痛みをほとんど考えずに過ごしてきたのではないかと、沖縄を報じる私たちもその視点を持たずにきたのではないかと考えさせられた。「50年」を機にそういうことを書かなければならないのではないかと考えた。

私たちは、沖縄と本土の間にある壁や溝を描いた。それを書くことで、本土の読者に沖縄の問題は自分たちの問題であると考えるきっかけになるような報道を目指した。

取材の中で、「沖縄と本土の距離は50年かけて縮まったけれども溝は深まった」とか「沖縄を取材するなら現場は本土にある」と言われた。そして沖縄の人からも本土の人からも、「沖縄を観光地として消費するだけで終わらせて欲しくない」と言われた。カレンダージャーナリズムのネタとして沖縄を消費するだけで終わらせることなく、来年以降も沖縄問題は本土も当事者であるという意識を持ちながら報道を続けたい。今回の受賞は大きな励みとなる。

基金賞（大賞） まえしまふみこ
前島文彦さん
山梨日日新聞社報道部長

沖縄問題は他人ごとでなくわがこと

西日本新聞の『島とヤマトと』と当社の『Fujiと沖縄 本土復帰50年』の2点が、大賞に選ばれたことをたいへん嬉しく思う。

私たちの企画では、全国調達庁職員労働組合という調達庁の労組が1945年から



1952年にかけての米軍占領期にどんな事件・事故、被害があったのかをまとめた資料があって、これを取材の出発点とした。

これを閲覧して、驚いた。1300件の事件・事故について非常に克明に描かれていた。山梨県内は28件。私たちはそれをほとんど報じて来なかった。GHQのプレスコードがあったからだ。『Fujiと沖縄』は、このベールに包まれた歴史をなんとか伝えたいという思いで始めた。取材は難航した。前述の労組の資料を頼りに事件・事故の現場へ行くのだが、家がない、更地になっている、誰に会うこともできない。でも取材を進めた。

米軍による事件や事故が相次ぎ、地域で風紀が乱れ、富士山麓では核を搭載できるロケット砲の発射実験が行われるに至って、「米兵は出ていけ」と基地反対運動が巻き起こった。米軍が向かった先が沖縄。沖縄の今の基地問題というのは本土に根っこがある。これを伝えることによって本土の人に当事者意識を喚起したいという思いがあった。

日米地位協定の問題を含め日本の国土に他国の軍隊があり、一部国内法については適用を逃れる状況がある。そうした問題を他人ごとでなく、わがこととして考えるような記事を引き続き書いてゆきたい。

おくあき さとる
奨励賞 **奥秋 聡さん**
NHK第2制作センター文化ディレクター

人びとの勇気が生んだ「久米島の戦争」

今回私が取材したのは、沖縄本島での組織的戦争が終わった後、米軍が離島の久米島に上陸、日本軍とにらみ合いをしている中で、赤ちゃんを含めた島の人たち20人が日本軍に殺されたという事件。沖縄でもそれほど知られている話ではありません。

5年前にNHK沖縄放送局に赴任した私は、事件の話の本を読んで取材したいと思い久米島へ行ったが、当時のことを誰も話してくれない。なぜか。一つは殺された側に生々しい悔しい気持ちが残っていたこともあったが、その一方で日本軍に「あの人はアメリカのスパイ」と密告したとされる人たちも同じ集落に住んでいたからだった。

ところが去年、久米島町史が初めてできた。町の博物館の職員が「いま証言を集めないと事件がなかったことになってしまう」と5、6年かけて生き残りの人びとから証言を集めて1冊の本になっ



た。これがきっかけで番組ができた。

私も、殺害の被害者の側だけでなく、加害の側の日本兵のその後を追う取材もした。遺族の一人は、泣きながら「お父さんが何をしたか、私として知る義務がある」と取材に応じてくれた。

悲しい歴史に向き合い、取材に応じてくださった方々からたくさんの勇気をいただいでこの番組ができた。そのことへの感謝の気持ちをお伝えしたいと思う。

かとう たく
奨励賞 **加藤 拓さん**
中日新聞社読者センター記者

現代社会に残る特攻のメカニズム

8部、36回にわたり掲載してきたコラム連載『ニュースを問う「特攻のメカニズム」』が栄誉ある賞をいただき感謝申し上げます。

立教大学大学院の修士課程で特攻の研究していた。生き残り特攻隊員の証言を集めていたので、新聞記者ならそうした証言を集めやすいのではと記者の道に進んだ。仕事の傍ら研究を続け、13年かけてようやく『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧』という資料集をまとめられたのが4年前。社内報にそのことを書いたら、「ニュースを問う」という長編コラム担当のデスクの目に止まり、連載してみないかという話になった。

連載では、特攻の負の側面が政界や企業やスポーツ界の理不尽な組織の論理につながっているのではないかと書いた。読者から多くの手紙やメールなどが届く。

戦争の風化が叫ばれて久しい。連載を続けるなかで、歴史は繰り返すという言葉のとおり、末端の人間よりも組織の都合ばかりを優先する特攻メカニズムが、戦争のない現代においても社会の闇として根強く残っているように感じている。改めて今こそ特攻を見直し、検証する必要があるのではないかと。

きむ そんらん
奨励賞 **金 聖雄さん**
映画『オレの記念日』監督

本当がウソにされる現実に声を上げる



金聖雄監督は『オレの記念日』の上映が浜松市であったため、贈呈式には参列できませんでした。録音を担当した吉田茂一さんが代理で出

席し、金監督のメッセージを代読しました。メッセージの要旨は次の通り。

「冤罪犠牲者の取材を始め、いつの間にか13年。4本の映画と2本のテレビドキュメンタリーを作ってきました。近ごろは『冤罪専門の監督?』と言われることもあります。

動機は単純です。ウソが本当にされて、本当がウソにされる現実を前に、声を上げないわけにはいかなかったからです。また、冤罪犠牲者たちは、不思議なくらい揺るぎなく凛としていて、とても魅力的でした。そんな人たちと出会ってしまったからには、撮影し、映画にしない理由が見当たりません。

ニュースにチャンネルを合わせると政治、戦争、ミサイル、殺人、自殺、環境破壊、そしてサッカーワールドカップ。『ブラボー!』の裏側で行われてきたことが、どれだけ報道されたでしょうか? ジャーナリズムと言われる中にも、ウソが本当にされて本当がウソにされる現実が潜んでいるように感じます。

奨励賞をいただくにあたって、『平和とは何か? ジャーナリズムとは何か?』と強く考えます。明確な答を持っているわけではありませんが、これからも仲間たちと一緒に、現場で出会う人に寄り添い、時間をかけて見つけ、何が描けるかを考え続けたい」

しのはら ひかる
奨励賞 篠原 光さん
信濃毎日新聞社報道部記者

一人称で読者と共に戦争を考える



栃木の出身ですが、信毎に拾っていただいて記者をやっている。

今年の夏、終戦企画の担当を担うことになった。去年もやったが、今年はロシアのウクライナ侵攻は外せない、と思った。と同時に、記者5年目とはいえ、この間、ぼくは世界各地の戦争や紛争等を食い止める上でわずかでも資するような報道をしてきたか? という反省もあって、今年は徹底的に平和とは何かをぼく自身が考える夏にしたいとの一心で、ペンをとった。

私自身の一人称も交えながら書くことで読者と共に考えるものを作れるのではないかと、デスクと話し合った。

ウクライナの状況を受けて、沖縄・南西諸島がキナ臭さを帯びているなど感じていたから、まず石垣島へ行き、そこに暮らす人から話を聞き、辺野古へも足を運び、新基地反対をしている人たちの声を聞いた。

長野に帰って元満蒙開拓移民に会った。ぼくの中で、ロシアのウクライナ侵攻と日本がかつて旧満州を侵略した行為とが重なったからだ。また、ウクライナの状況を受けてエネルギーのあり方が議論されていたから、福島原発事故後、長野県の飯綱町に避難している方の話を聞いた。

時代の大きな物語の中でかき消される人がある。その隣で共に言葉を探し続け、それを政治権力側に投げ返していくことがメディアに求められている。そのことを改めて強く自覚して働き続けたい。

たかはしのぶ お
奨励賞 高橋信雄さん
元長崎新聞論説委員長

反骨反戦の鈴木天眼を発掘



明治から大正にかけて長崎で『東洋日の出新聞』が発行されていた。その主筆が鈴木天眼で、論説を書いていた。これを発掘して読み解いたのが、『鈴木天眼反骨反戦の大アジア主義』です。他の受賞作品に比べて毛色の変った作品だが、名誉ある賞を与えていただき、たいへん感激している。

天眼は、すばらしい論説を書いていたが、完全に埋もれていた。『東洋日の出新聞』は23年間分が丸々地元の図書館に保存されているのだが、昔の文章でむずかしく、読む人がいなかったのでしょう。

ある時、日露戦争のころの新聞を調べるために『東洋日の出新聞』を読んだ。ふと論説に目をやると、日露戦争で日本中が戦勝気分でも沸き立っているのに、論説は軍国主義をきびしく非難し、国家主義にも反対していた。地元警察の検閲とか民衆への横暴を取り上げて、これを徹底的に糾弾するキャンペーンも展開していた。

「これはただ者ではない」と思った私は、図書館へ3年近く毎日通い、天眼の論説を調べ、そのエッセンスを本にした。

天眼は軍国主義、国家主義に反対するほか、膨張主義、侵略主義も戒めていた。さらに、孫文とまったく同じ視点で平等・互恵のアジア主義、人間を大切にす大アジア主義の論陣を張っていた。天皇神格化政策も公然と批判した。

歴史がゆがんできた時に声を上げた鈴木天眼の論説を皆さんにも読んでほしい。今回の受賞により、天眼もようやく歴史の中の片隅に名前をとどめることができた。

まつざわつねお
奨励賞 松澤常夫さん
日本労働者協同組合連合会常勤相談役
労働者協同組合は一つの希望



労働者協同組合法ができたが、皆さん、ほとんどご存知ないと思うので、ちょっとだけ紹介させていただく。岩波ブックレットが『<必要>から始める仕事おこし』を今年の2月に

出したが、私が書いた。冒頭に、こう書いた。「働くということとは、雇われて、命令されて仕事をするということなのか。自分を売り渡すのではなく、主体者・主人公となり、力を合わせて、人と地域のために働くことはできないのか。こんな当たり前で、労働とは、人間とは、を根本から問う声に、国会は真摯に向き合い、見事な回答を描いてくれた。市民が主体者として、協同・連帯して働く‘協同労働’と呼ばれる働き方をとする労働者協同組合(ワーカーズコープ)に法人格を与える労働者協同組合法が全党・全会派一致で参院本会議で2020年12月4日成立した」

労働者協同組合を作った母体は「全日自労」だった。全日本自由労働組合。失業対策事業で働いていた日雇い労働者の労組だ。失対事業を打ち切られた人たちが自治体と交渉して「事業団」という受け皿を作るから役所から仕事を出してくれと主張、仕事を得た。そこから労働者協同組合が始まった。

全日自労に入って以来、労働者協同組合とはどういうものか、その活動をずっと新聞に書いてきた。今、労働者協同組合法にのっとなって、新しい組合を作ろうという運動が各地で起きている。ひとつの希望がそこに見える。こうした人びとと一緒にがんばっていききたい。

みやざきそのこ
奨励賞 宮崎園子さん
フリーランス記者・元朝日新聞記者

個人として反核を訴えた被爆者

昨年の春まで広島で朝日新聞の記者をしていたが、その後はフリーランスの記者として、広島で活動している。

朝日新聞という大きな組織を離れて一人で広島で書き続けようという判断をした時、多くの被爆者から「もったいない。東京に行って活躍してくれ」と言われたが、取材の中で出



会った被爆者、岡田恵美子さんだけは「おめでとう。これから一緒に頑張っていこう」と言ってくれました。

彼女は被爆者団体に属さず個人として核兵器廃絶を訴える人生を歩んでこられた。私の独立の日、岡田さんはお祝いをしてくださったが、その翌日に急逝した。そこで、一人の被爆者として生き抜いた彼女の足跡を1冊の本にして残したいと思った。被爆者となり、苦難の人生を歩み、無念のうちに死んでいった人があるのだということを具体的に細かく記したいなと思った。

広島とは何か？をずっと考えてきたけれども、いま広島は瀬戸際であり、正念場を迎えている。広島から国会に送りだしている岸田総理大臣が、防衛費の増強とか、敵基地攻撃能力とか、いろんな勇ましい政策を展開して、憤りを感じる。

私たち広島市民が送り出した政治家がこんなことを言っている現状をどう受け止め、何をすべきかを深く考えさせられる。

第28回 平和・協同ジャーナリスト基金賞

選考経過

沖縄問題を論じた企画に秀作が並ぶ

第28回平和・協同ジャーナリスト基金賞の選考には太田直子（映像ディレクター）、鎌倉悦男（プロデューサー・ディレクター）、高原孝生（明治学院大学教授）、鶴文乃（フリーライター）、前田哲男（軍事ジャーナリスト）、本間健太郎（芸能クリエーター）、森田邦彦（翻訳家）の7氏が当たりました。

22年度2月にロシアがウクライナに侵攻したので、今年度は、ウクライナ戦争に関する作品が多いのではと予想していましたが、意外にもそうしたことは起きませんでした。その代わりに、22年が沖縄の本土復帰50年に当たったため、「沖縄」をテーマとした作品が多数寄せられました。それも、大作、力作、労作が目白押しで、審査委員もどれを入賞作に選んだらよいか迷ったほどでした。

その他、安保問題、原爆問題、難民問題に関する作品が寄せられました。

■基金賞＝大賞に選ばれたのは、西日本新聞社社会部取材班の『「島とヤマト」など、沖縄と本土の関係に焦点を当てた本土復帰50年報道』と、山梨日日新聞取材班の『Fujiと沖縄～本土復帰50年』でした。

通例、基金賞＝大賞に選ぶのは1点だけなのですが、今年の選考委は、「甲乙つけがたい」として2点を選びました。

両作品に共通していたのは、沖縄問題に対する両紙の取材の姿勢が、従来のメディアと異なっていたということです。

西日本新聞取材班は「議論を重ねてたどりついた答えは『沖縄について無関心だった』ということでした。沖縄問題は『沖縄だけの問題』ではなく、『本土を含めた全国民の問題』であるはず。私たちは当事者としての意識を持たずに沖縄を報じてきたのではと考えさせられた」と言い、山梨日日新聞取材班も「山梨県内にも沖縄県の基地問題へつながる過去があり、まずは埋もれつつある地元の歴史に光を当てるのが、基地問題を『自分ごと』として捉える一歩となると考えた」と言います。

こうした両紙の取材姿勢が、選考委では高く評価されました。

■奨励賞には活字部門から5点、映像部門から2点、計7点が選ばれました。

まず、活字部門ですが、中日新聞読者センター・加藤拓記者の『ニュースを問う「特攻のメカニズム」』は、戦時中の航空特別攻撃隊の実態を徹底的に取材してまとめた長期連載ですが、選考委では、連載を通じて、「個人の生死よりも国家を優先する戦時下の狂気と恐怖、さらにその非人間的な組織の論理が、大企業における品質不正問題や過労死など、現代の日本社会にも根深く流れている」と指摘している点が評価されました。

同じく奨励賞に選ばれた、篠原光・信濃毎日新聞記者の『戦後77年 平和を紡ぐ旅 26歳記者がたどる』も斬新な企画として、審査委員の注目を集めました。26歳という若い記者を、「戦争と平和」の問題が先鋭化している地域（沖縄の石垣島や辺野古など）に派遣して自由にルポを書かせるという企画で、その狙いを、同社報道部デスクは「ウクライナ危機で、いよいよ『戦後』と言えない時代になった今年ならではの反戦企画をやれないかと思った。もう一つの狙いは、若い記者に戦争とは何か、戦争をなくすにはどうすればいいのかを考えてもらうことだった」と話していますが、そうした狙いが見事に実った記事、と絶賛されました。

やはり奨励賞となった高橋信雄・元長崎新聞論説委員長の『鈴木天眼 反戦反骨の大アジア主義』は、明治から大正にかけて、長崎で「東洋日の出新聞」を発行し続けた鈴木天眼の生涯を描いた作品です。本書によれば、天眼は中国の孫文と親交があり、日中が平等互惠の精神で結ばれるべきとする大アジア主義を唱える紙面を精力的に展開しました。さらに、彼は軍国主義に反対し、日本の満州進出を非難し、韓国併合後の現地における日本人の傲慢を憤ったといえます。選考委では「嫌中憎韓の書籍がはんらんする今日、天眼が唱えていた大アジア主義に耳を傾けることも必要なのは」との発言がありました。

労働者協同組合法が今年10月から施行されました。労働者自身が出資、経営参加し、働く事業体を協同組合として認めようという法律です。日本の歴史に初めて登場した新しい労働形態、新しい協同組合の形態で、日本社会にとって画期的な出来事でした。これには、日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会などによる40年余に及ぶ労協法制定運動があり、その中で大きな役割を果たしたのが、同連合会が発行する機関紙『日本労協新聞』でした。

その編集長を30年にわたって務めたのが松澤常夫さんで、選考委は「労協法への関心を高め、理解を深める上で、松澤さんがおこなった紙面展開は大いに役に立った」として、松澤さんに奨励賞を贈ることになりました。

奨励賞を受けたフリーランス記者・元朝日新聞記者、宮崎園子さんの『「個」のひろしま 被爆者岡田恵美子の生涯』は、昨年4月に亡くなった岡田さんの生き方を紹介したノンフィクションです。岡田さんは被爆者団体に属さず、1人の人間として、多様な方法で核兵器廃絶を世界に訴え続けました。選考委では、「丹念な取材と執筆で、ひたむきに生きた被爆者の思いと活動が活写されている」とされました。

■映像部門で奨励賞となった2点は、NHK沖縄放送局・第2制作センター文化『ETV特集・久米島の戦争～なぜ住民は殺されたのか～』と、Kimoon Film制作の『オレの記念日』（金聖雄監督作品）です。

前者は、敗戦間際の沖縄・久米島で日本兵が住民20人を殺害した事件を取り上げたドキュメンタリーですが、選考委では「当時の戦況、集団心理、差別感情等を描くなど多角的な構成により、この番組を観た人びとに強烈なインパクトを与えた。戦争がいかに空しいものであるかを表現している優れた番組である」と評されました。

後者は、20歳の時に冤罪で殺人犯にされて無期懲役の判決を受け、29年間刑務所暮らしをした後に仮放免され、再審で無罪判決を受けた男性の日常生活を追ったドキュメンタリー映画ですが、「長い獄中生活に負けなかった強い意志を持った人間像を巧みに表現した力作と言える。今日の日本の司法のあり方を考えさせる作品でもある」とされました。

平和・協同ジャーナリスト基金 (PCJF)

〒116-0012 東京都荒川区東尾久2-45-6

メゾン尾久703号室

電話・FAX 03-6458-2116

<http://www.pcjf.net/>

郵便振替口座 00110-8-651888

編集：中村易世